

小原 佐和子著

神の真庭

「神の島」と呼ばれてきた
沖縄・久高島の聖域である
御嶽の本質を「何もない眩
暈」と言ったのは、『沖縄
文化論』忘れられた日本」
の岡本太郎であった。その
「何もない眩暈」をどのよ
うに撮るか、写真家の本領
が問われることになる。

どこにもある単なる一離島
である。もちろん、そのよ
うな一般事例を特殊事例の
個物の風光として切り取っ
て見せるのも写真家のワザ
ではある。



神の真庭

小原佐和子

A4変・74頁・3600円
蒼穹舎
TEL. 03-3358-3974

その大変困難な課題に立
ち向かう時、著者は、写真
家として、「神の島」の光
を極力排して、神の島の影
と奥に迫ろうとした。その
物深さと昏さが、「神の島」
を「神の真庭」として観撮
る写真家の解像力となって
いく。

ガマとしての久高島をつらぬく 「神聖エネルギー」の交通を映す

鎌田 東二

「神の真庭」とは何か？
それは古来言われてきた神
聖なる「斎庭」としての
「神の島」とはどのように
異なるのか？「斎庭」か
ればならない。そうでな
ら「真庭」までの距離の中
に、写真家としての著者の

立ち位置とメタノイアがあ
るのだろうか。
沖縄本島南城市知念岬の
東方5・3キロ沖に位置す
る周囲8キロの久高島は、
実際は光の島そのものであ
る。久高島には高い山がな
いので、谷間や河川もなく、
離島ではなかった。長らく
すべての平面的に南島の光
の中に露出し、平べったい
水母のように浮かんでい
る。

だがその光の下に露わに
なった現実の姿の「奥」に、
「神の真庭」を透視しなけ
ればならない。そうでな
ければ、そこは限界集落化が
進行している日本列島内の
の製作に関わって来た私は、森羅万象にモノ宿るア

ニミズムといのちの交歓が
あった。そして、その大重
の眼差しを支える民俗写真
家の比嘉康雄の『日本人の
魂の原郷 沖縄久高島』
(集英社新書)があった。
大重が死去した後、その
久高島をどう見つめ、関わ
るかを自ら問い続けていた
が、そのような中に本書
を目の当たりにして、光の
島としての久高島には見え

なかった薄暗がりの「奥底」
に、岡本太郎が言う「神聖
エネルギー」の蠢きを感じ
とった。それは具体的に、
猛毒を持つウミヘビ・イラ
ブーの存在に象徴され、集
約される。平たい久高島の
内部はほぼ空洞であり、ガ
マ(洞窟)であり、そこに
イラブーが集う。そのガマ
としての久高島をつらぬく
「神聖エネルギー」の交通
を「神の真庭」は映し出し
ている。(かまた・とうじ
||上智大学クリーフケア研
究所特任教授・京都大学名
誉教授・宗教哲学)
★おぼろ・さわこ||写真
家。日本大学芸術学部写
真学科卒業。国内外で個
展やグループ展を行う。